

# 激動の経営

## 半導体を勉強

石井宏宗はサンシン電気に興味がなかった。しかし、父・雅晴の懇願で会計事務所の内定を断り、親会社のサンケン電気に入社する。最初の配属は石川

## サンシン電気

②

県の石川工場（現石川サンケン）。石井は「実際に『おまえは人質だ』と言われたが、期せずしてモノ作りの現場は面白かった。猛烈に半導体の勉強に取り組んだ」という。これが現在につながる石井の基礎を築いた。

数年後に石井はサンシン電気に戻り、大阪勤務などを経て順調に知識と経験を積んでいた。サンシン電気も1981年に子会社で電子部品商社のシグマ電子（東京都練馬区）を設立。事業を拡大し

## 子会社、事件、経て稼ぎ頭



東京・江古田で創業したシグマ電子（当時）

ていた。そんな中、石井が28歳で同社役員に就任した直後に事件が起きた。同社社長が失踪したのだった。横領の発覚

を恐れてのことで「売上高5億円の規模の会社だったが、被害額が2億円以上に上った」。企業経営に致命傷を負い、石井はすぐに父・

## 新成長へ持ち株会社移行

雅晴と吉本貞敏に対応策を相談。すると2人そろって「あんたがなんとかするんだ」と発破をかけた。

### 闘志燃え上がる

「どうして俺なんだ」と不満を感じた一方、「俺がやらなければ誰がやるんだ」と不屈の闘志も燃え上がった。このシグマ電子の再建が石井の経営者としての転機となった。

「今となって冷静に考えると、父らの指示は手に負えなくなった事業を清算してほしい」という意図だったかも知れない。大きな痛手を負った

シグマ電子の再建が簡単ではないことは誰の目にも明らかだった。それでも石井は「器さえあれば、何かしらやることはある」と自信を持っていった。しかし、何を始めるにしても資金がない。そこで石井は結婚したばかりの妻を連帯保証人にまでして、数千万円を借り入れた。

### 新たなビジョン

事態は次第に好転して「大きな案件を獲得できるようになり、家電などで使う電子基板リペア用メンテナンスパーツが東南アジアでヒットを飛ばした」。

業績は劇的に改善し、グループの稼ぎ頭に成長。借金を返済した上に、各社の株を買増せるようになった。そこで石井は新たな経営ビジョンを描き始めた。「シグマ電子を持ち株会社化し、グループ各社を傘下にもつ新経営体制への移行を考えていた」という。

グループ会社の株を買い増し、電子部品の事業を切り離して2008年に社名変更し「新東ホールディングス」が誕生。ここには同族経営に対する石井の哲学が込められていた。

（敬称略）